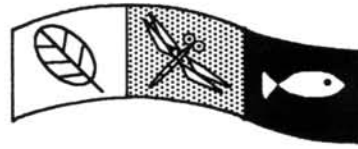


Rio



リオ ～豊田市矢作川研究所 月報～ No. 27



矢作川源流の大川入山（長野県平谷村）（2000年7月2日 横井 恭夫氏 撮影）



地方の淡水魚同好会に求められること

高橋 弘明

淡水魚に関する調査や研究は国内では非常に盛んであり、水生生物としては情報量の多い分野といえる。淡水魚は、川や池等、身近な場所に生息するため古くから関心が高い。それに加え、地域における自然史研究の題材や理科教材、あるいは環境保全のシンボルとして格好の対象となってきた。

淡水魚研究がこれ程盛んに行われてきた背景として、私は各地方に存在する同好会や研究会といったアマチュア研究組織の功績が大きいと考えている。こと、淡水魚に関しては、1県1団体といえる程、同好会や研究会が多く存在し、地方によっては調査が行き届き、各種の分布情報に事欠かな

い場合もある。また、各県版の淡水魚類図鑑、自然史解説書、レッドデータブック等の書籍は、地方の陸水域調査や研究に欠くことの出来ない重要な資料となっている。

しかしながら、これら地方の同好会や研究会が、新たにその地域の淡水魚研究や調査を始めようとする際に障害となることがある。私の勤める環境コンサルタント会社では主に、官公庁や地方自治体からの委託を受け、各地の河川や湖沼の調査を行っている。その際、対象地域（河川、湖沼）で過去に行われた調査や研究に関する資料、あるいは地元研究者からの聞き取りによる情報収集を行う必要がある。直接に地元の研究者にお会いして

話をうかがえる場合は良いのだが、文献を引用する場合、記載内容によっては種を同定することが困難であったり（一種と思われていたものが複数種に分けられた場合等）、地方名が別の種の標準和名と重なっており、誤りがいつまでも修正されずに残っていたりすることがある。それでも、標本が残っていれば再検討の余地があるが、標本を全く残していなかったり、標本はあっても個人の手で管理が委ねられているため、照合が困難である場合がほとんどであった。

さらに、このような同好会や研究会の多くは少人数のメンバーから構成されており、高齢化が進行して現地調査を継続できない、最新の研究成果を入手するための情報網が不十分なために、新たな知見が取り入れられていない等の問題もある。

フィールド研究の分野では全国版の報告書や図鑑等にはない地域特有の情報が重要であり、これらアマチュア研究組織の活躍なくして今日の淡水魚に関する情報の蓄積はなかったと言っても過言ではない。しかし、大なり小なり地域のアマチュア研究組織は上記のような不備を抱えており、研究内容の調査体制と再現性の確保（例えば標本の確実な保存）、後継者の育成が重要な課題であろう。当然、私達調査会社の人間が地元以外の場所に出向いてその場限りの調査を行うことの是非もあろうが、何とか地元の研究グループと協力して良い成果をあげられたらと思う今日このごろである。

（たかはし ひろあき、西日本科学技術研究所 研究員）

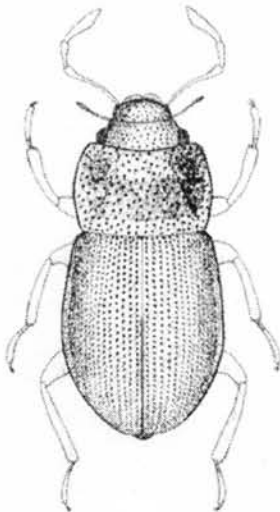
矢作川水域から見つかった新種

③ メンノキダルマガムシ（新称） *Hydraena chifengi* Jach, 1999

吉富 博之

この種も愛知県稲武町面ノ木峠で見つかった新種です。

Leeさんとヒゲナガヒラタドロムシの幼虫を採集しているときに、やはり濡れた落ち葉の下から2 mm弱の小さなコウチュウを採集しました。研究室に帰って顕微鏡で調べてみるとダルマガムシ科に所属する虫であることが判りました。ダルマガムシは小さな水生コウチュウで、溪流沿いの石の上などに生息しています。顕微鏡で覗くと比較的にかっこいい虫です。図鑑を調べると四国に生息するシコクダルマガムシに似ていましたが、そのまま詳しく調べることはしませんでした。



メンノキダルマガムシの近縁種のミヤタケダルマガムシ *H. miyatakei* (Sato, 1959)より転載

1999年、学術雑誌を見てみると、オーストリアのDr. Jachの論文が目につきました。その中でこの種が新種として記載されていたのです。私と採集に行っ

た際、Leeさんもこの種を採集されていて、その標本をダルマガムシの研究者であるDr. Jachに送っていたのでした。学名もLeeさんに献名されて、*chifengi*となっています。もし、あの時詳しく調べていて新種だと判っていたら、この虫にも私の名前が付いたかも知れません。少し残念です。

基準産地は愛知県稲武町面ノ木峠です。現在のところ、この面ノ木峠でしか見つかっていません。小さな虫なので、十分に分布の調査がされていません。この虫も生息環境が限られていることから、注意しないといつの間にかこの地球上から姿を消してしまう虫かも知れません。体長は2 mmほど、全身黒く、細長い体をしています。体の下面は呼吸する器官として短い毛がびっしり生えていて、銀色に光って見えます。面ノ木峠で溪流沿いの湿った落ち葉を一枚一枚ひっくり返すと、幸運ならばこの虫に出会えるかもしれません。

記載論文：

Jach, M.A., & J.A. Diaz (1999) Description of two new species of *Hydraena* Kugelann from Honshu, Japan, with a check list of the Japanese species (Coleoptera, Hydraenidae). *Jpn. J. Syst. Ent.*, 5: 337-340.

（よしとみ ひろゆき、(株)環境指標生物)

矢作川観察ノート



— ⑤ 飯野川の魚道 —

新見 幾男

矢作川支流の飯野川に、人の背丈の2倍ほどの高さの砂防堰堤があり、そこに昨年、写真に見られるような階段式魚道が設けられた。豊田市西広瀬町地内の川の風景である。



飯野川の魚道の全景 (2000.7.8)



同上魚道の登り口付近の構造 (2000.7.8)

飯野川はこの堰堤から2kmほど下流で、矢作川本流に合流する。合流点付近には落ち鮎捕獲用の広瀬ヤナがあり、対岸には名鉄三河線の三河広瀬駅がある。近くに矢作川と飯野川の水質調査で有名な市立西広瀬小学校もある。

この砂防堰堤から矢作川までの約2km区間には、すでに二つの小規模な魚道が近年に設置された。飯野川は小魚の多いことで有名な川だが、この大型の砂防ダムが魚止めになっていて、矢作川の魚類が上流の西加茂郡藤岡町飯野方面にまで遡上していくことはなかった。

飯野川を管理する愛知県豊田土木事務所では、

さらに魚道の新設整備を続け、この支流全体に矢作川の魚類の棲息区域を拡げたい意向だ。昨年の階段式魚道の完成によって、その最大の難関が取り除かれたことになる。この石積み高さの砂防堰堤はもともと優美な姿だったが、魚道が設置されたことにより、何やら生命の存在を感じさせる風景にもなった。

さて、この写真の階段式魚道を魚は遡上できるのか。結論的に言って、鮎などの元気のいい魚の遡上は可能だと思うが、底生魚を中心とした各種小型魚を遡上させるには、いくつかの改善工事をしなければならないだろう。

魚道の水流は階段を下り、途中で180度転回して更に階段を下り、堰堤の頂上から垂直落下する水流と合流する。そこに魚道の登り口がある。その登り口の構造を2点改良すれば、遡上力の弱い小型魚も魚道に入ることができるようになる。

下の写真を見てもらいたいのが、第一に、登り口付近にある2枚のコンクリートの隔壁のうち、右側の隔壁、つまり堰堤側の隔壁は余分な存在ではないか。この壁があるため垂直落下してきた水流が魚道の水流と一体化できない。魚が行く先を間違えて、一直線に魚道に入れない可能性がある。右側の隔壁は撤去した方が良くと思う。

第二に、魚道の登り口の最下段の階段が高すぎて、小型魚の遡上は困難ではないか。各階段の段差も全体に高すぎる。

もう一つはこの魚道には渇水期対策がない。堰堤頂上からの垂直落下する水流は、魚道の登り口へ魚を集めるための呼び水になるのだが、渇水期の少量の水は魚道の登り口付近に集中落下させた方が良く、幅広くチョロチョロ水を落下させていたのでは、魚たちが行く先を迷うのである。

この魚道を設計したであろうコンサルタントたちが矢作川の魚類のことをもう少し勉強し、土木技術者たちが地元の人々と相談して工事をしていれば、手直し工事は必要なかったであろう。砂防堰堤と魚道の姿はすでに十分に美しいのである。

(にいみ いくお、矢作川漁業協同組合 専務理事・
豊田市矢作川研究所 事務局長)

